

平成 24 年度スタンフォード大学研修に参加して

奈良県立医科大学附属病院 山谷 裕哉

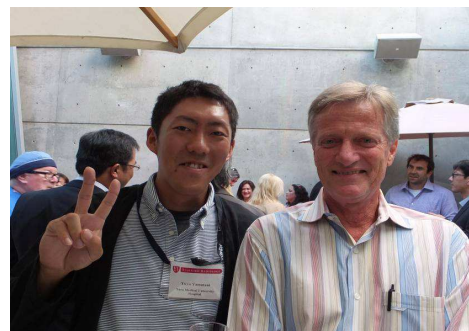
1. 学会の国際化と私たちが目指す学会

私には国際学会に参加した経験もなく、この研修が初めてのアメリカ体験であり外国の同じ分野の研究者や技術者と意見交換をおこない指導を受けること自体初めてで、とても刺激的な経験であった。そんな未熟な私が今回の研修を通して学会の国際化について思うことは、広い視野を持ち世界に目を向けること。そして、日本から世界に発信することである。次の春の学術大会において発表のスライドを英語表記にすることや、英語で口述発表することが始まるが、これらのことは日本放射線技術学会での経験を足がかりに世界各地の国際学会での発表を目指すものにとっては大変意義のあることであると考え。また当学会より世界に通用する研究者を育成し、たくさん輩出するためには英語で表現することは必要不可欠である。ただ英語で発表すること、論文を書くことは英語が苦手な私にとっては、果てしなく高いハードルであることは間違いない。しかし、いつか変えなければならないのであればそれは早いほうがいい。世界で行われている研究に目を向け、さらに世界に日本の技術、研究を発信し、その結果、世界から研究者が集まることが国際化なのではないかと考える。また我々は医療に携わる者であり、より良い医療を実現させるための研究を行い常に医療の質を向上させる義務がある。ただ施設間や技術者間に大きな格差が生じることは医療を受ける側からすればあまり好ましくない。そこで学会としてできることは、実力のあるごく一部の優秀な研究者だけが高い技術を保持するのではなく、日本全体のレベルを高めるためにどのような教育が必要か検討しなければならない。

2. 研修で得たことを今後どのように生かすか

今回この研修に参加した目的は、診療放射線技師として働き始め10年以上が過ぎる程度いろんなことを経験し少し緩んでいるところに刺激が受けたくて応募した。今回の研修は私の人生において大きな影響を与えていることは間違いない。当然、研修に行けば急に自分のレベルが上がるわけではない。しかし、参加してみればアメリカの研究の規模の大きさ、見たこともない技術などはもちろんのこと、何より一緒に参加されている研修生の方々のスキルのあまりの高さに驚かされた。そして自分の英語力の無さ、研究の組み立ての未熟さ、努力不足を痛感した。ただ今の段階でこのこと気づくことができ、さらに素敵な仲間がたくさんできたことが最も大きな収穫であったと思う。この経験を周囲に伝え、今後さらに臨床に研究に力を入れていきたいと思う。

最後になりましたが、このようなすばらしい研修の機会を作ってくださった、Moseley 先生をはじめとするスタンフォード大学関係者・GEHC-J・日本放射線技術学会関係者の皆様また引率の金沢大学の田中先生、そして快く送り出してくれた上野山技師長を始めとする奈良県立医科大学附属病院中央放射線部の皆様に心より感謝いたします。



ワインパーティーにてMoseley先生と